



定年まで勤めた会社の元同僚との、いわば同窓会山行である。

11月に先輩の関さんから、大山の紅葉を見に行こうよとの声がかかった。残念ながら今回は紅葉には遅すぎたが。関さんは特に山登りが好きという訳ではない。私が100名山を目指していた最終章に近かった1985年に筑波山へ登った時に付き合ってもらったことがある。茨城県の牛久に住んでおられるので、登る前日は泊めていただいて山へも一緒に行った。関さんとの登山記録なんてこの一度きりである。我々の従事していた建築設備の世界は、技術の分野と言っても科学的な思考などとは程遠く、予算がない仕事でも赤字を出さず、あるいは行程が厳しい仕事でも竣工日には間に合わせることが、優れた技術者であると評価される世界である。こういった環境の中でも関さんは、自宅の庭に実験装置を作ったり



関さん

会社の屋上に試験設備を作ったりして、“学究の徒”と呼べる人であった。定年後25年を過ぎた今でも、電力量計や熱量計などを駆使してコンサルタント業として軽トラを乗り回して活躍している。もっとも最近では100坪の畑作業の方が中心になっているみたいだ。

片桐君とは、私が社会人になってから一番沢山一緒に山に登っている。長野県野沢村の出身で山にはめっちゃくちゃ強い。大雪山から十勝岳への縦走や、北アルプスの鹿島槍から白馬までの縦走など、私にとってキツイ山は常に片桐君と一緒にであった。私の還暦の誕生日を金峰山の小屋でやった時にも付き合ってもらった。2011年に常念岳・蝶ヶ岳へ登って以来6年間一緒に登ることが途絶えていたが久しぶりだった。あの時は片桐君のスピードについてゆくことができず、山小屋に泊まる時だけが一緒であった。片桐君の奥さんに変な疑いをかけられたくないので、それ以来彼との山行はしないことにしていたのである。新米定年者であるのでやることのないのに困って、今年の夏は尾瀬の山小屋でアルバイトをしたとのことである。ケッコウ厳しい仕事であったらしい。来年からは孫の子守でもやったりゃあいいんだ、ジジイらしく。

出野君は還暦は過ぎてるとはいえまだ仕事では現役である。彼ともケッコウたくさん登っている。一応山好きとはいえるが、“山に青春をかけた”と言うほどではない。私が100名山を目指していた最終章近くの1986年に日高幌尻岳の時には、一人で行くには心細かったので付き合ってもらった。その後で阿寒岳へ回ってオートキャンプ場にテントを張って、最初は雌阿寒に登り次の日は雄阿寒であった。朝から雷を含む大雨であった。雌阿寒の方が高いが、深田久弥が書いているのは雄阿寒に登った時のことである。なんとしても登らなければいけないと、私は雨の中を出発した。当然出野君は行くわけもなく、そのとき彼が私の背中にぶつけた叫び声が傑作であった。“100名山は宗教だ”。確かに言えてる。この時にはもう一つエピソードがある。キャンプ場から登山口まで1時間ほどの国道歩きがあった。Tシャツに短パン、サブザックに登山靴といういでたちで歩いてた。バイクのツーリングのグループと何組かすれ違った。みんな一斉に片手を上げてエールを送ってくる。山登りの前にはあらかじめ旅館を取るが、降りてからの予約はしたくない。それによって行程が縛られてしまうのが嫌なのである。そんなわけで、いきなり観光案内所へ行って宿の手配をすると、ツーリングのグループと相部屋になることも多かった。だから彼らの性質もある程度分かっていた。みんな何かを求めて旅に出ている。そんなことを知る前は暴走族との区別もつけていなかった。しかしいい加減な奴では1週間やあるいは1か月にも及ぶツーリングに耐えられるわけがない。そんな人たちからエールを送られるとこちらも気持ちがいい。すがすがしい気持ちで私も片腕を振り上げてエールを送り返した。

翌1987年に富士山を最後にして100名山を達成した。